西水　美恵子

にしみず・みえこ＝75年ジョンズ・ホプキンス大学院卒、プリンストン大経済学助教授を経て、世銀副総裁。退任後、シンクタンク・ソフィアバンクのパートナーなどを務める。

ウエーブ　時評

2011.12.19

人民王の本気

日本に限らず世界中で暗いニュースが多すぎた今年、明るいニュースの筆頭は、先月国賓として来日されたブータン国王、雷龍王五世の御成婚だろう。世界の主だったマスコミがブータンへ取材に来ていたが、特に印象深かった報道は、BBCワールドニュースだった。現地からの特派員ニュースを流した直後、ロンドンのアンカーマンが心底嬉しそうに微笑んだ。そして締めくくりにただひと言、Good stuff！（いいねえ！）。即位間もなく、誰からともなくPeople's King（人民王）と呼ばれるようになった王者の姿が、ニュースのストーリーはもとより、映像のいたるところに明らかだったからだろう。

「民のために」との御意を受けて、婚儀祝典の主役は国民。他国の王族の姿は見あたらず、外国人は、SAARC（南アジア地域協力連合）諸国の次世代リーダーと、国交を結ぶ少数の国々の大使夫妻、私たち夫婦のように私的に招かれた数人だけだった。

10月吉日、ブータン仏教の総本山がある古都プナカで、婚儀は大僧正により厳かに挙行された。

翌日、首都ティンプーまでの国道沿いに、参賀に駆けつけた村人たちの人垣が延々と続いていた。標高1200㍍の古都から2300㍍の首都まで、その間標高3100㍍の峠を超える道程である。国王王妃両陛下は、その殆どを車から降り、日の出前から真夜中まで参賀に応えつつ歩き通された。

敬愛と忠誠の印に白絹のスカーフを捧げて深々と頭を下げる沿道の人々。その一人一人の目線まで、丁寧に腰を屈める王と妃。お年寄りには肩に手を置き、子供にはキスをしてくれと頬をむけ、幼児を見れば抱き上げて、「僕のワイフだよ！」と、誇らしげに王妃を紹介する王……。

祝典は、首都の屋外スタジアムで催された。参加した約10万人の声に応じ、王妃の頬にキスをして、物足りないと言う観衆のどよめきに赤面する王。それではと素早く唇を合わせて、民と共に笑う王と妃。ブータンの発展と今日の自分の幸せがあるのは、雷龍王四世の献身的な努力の賜物だと、観客席の父君に深々と礼をして、民衆の涙を誘う王。盆踊りによく似る踊りの輪に飛び入って、国民と共に楽しむ王……。

そのお姿に、戴冠式以来重ね続けておられる全国各地への行幸に想いをはせた。祖父君雷龍王三世による土地改革が残した問題点を、最終的に解決するためだが、最高目的は、新国王として国民一人一人の「心を聴きとる」ことにある。ご婚約が公にされてからは、王妃もお供に加わった。

行幸とはいえ、車に頼る安易な旅ではない。海抜200㍍前後のインド国境を覆う亜熱帯ジャングルから、7千㍍級のヒマラヤ巨峰が連なる中国チベット県との国境まで、直線距離は僅か200㌔。そこを無数の激流が貫く国土は、複雑に入り組みながらせり上がる山脈の連続である。国民約70万人の大半は、車道から徒歩で半日以上の距離に住む。往復数週間かかる僻地の在所も多く、人口密度にして1平方㌔あたり約17人が、日照時間の長い山肌を求めて散在する。橋のない川を歩き渡り、酸素の薄い大気に喘ぎ、雨期には蛭に血を吸われ、蚊や蚤虱に悩みつつ、野宿を強いて、一軒一軒、民家を訪ねゆく行幸である。

だからこそ、国民総出で「人民王」御成婚を心の底から祝う時だった。祝典に臨む国王の姿勢には、2年前の戴冠式で「息子として、兄弟として、親として、民に尽くす」と誓ったリーダーが、家族である国民と幸せを分かち合おうとする本気のみがあった。

その本気を礎に築かれたリーダーと国民の相互信頼と調和が、どのように高価な飾り物よりも美しく輝いていた。国家安泰の要ここにありと、涙が止まらなかった。